

鉛筆削りの教訓

智辯学園中学校3年 田林 葵衣

孔子の言葉に、こんなものがある。
「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。」
過ちをしたことに気づいても改めない、それが本当の過ちである、という意味だ。この言葉を国語の授業で習ったとき、私の頭の中にある1台の鉛筆削りが思い浮かんだ。

私が小学6年生だった頃の話だ。クラスに1台、手動の鉛筆削りがあった。ある日、私はその鉛筆削りで自分の鉛筆を削っていた。すると突然、鉛筆削りの取っ手が止まったのだ。前にも後ろにも回せなくなり、イラッときた私は力任せに取っ手を動かした。

「バキッ。」

やばい。おそろおそろ自分の手元を見る。

「うわっ、田林が鉛筆削り壊したー！」

「俺も次使おうと思ってたのにー。」

男子達の野次が飛んでくる。

(やってしまったー……。こんなの、先生にバレたら絶対に怒られる……。)

何が何でも怒られなくなかった私は、折れた取っ手をその場に置き、まるで何事も無かったかのように自分の机に戻った。

その日の放課後のこと。私は担任の先生から呼び出しを受けた。

(鉛筆削りのこと、バレたんや……。)

案の定、先生の顔はどこからどう見ても怒っている。

「葵衣。」

先生が口を開く。

「先生が何で怒っているのか。心当たり、あるよな？」

私は正直に答えた。

「私が学校の鉛筆削りを壊したからです。」

先生はふう、とため息をつき、それからもう1度口を開いた。

「ええか。先生が怒ってるのはそんなことに対してとちゃうねん。葵衣が鉛筆削りを壊したことをすぐに先生に言いに来なかったからや。誰でも失敗はするよ。でもそれを隠したらあかん。正直にすみません、って言わな。」

先生の言葉を聞いたとたん、私は急に恥ずかしくなった。なぜこんなにずるくてかっこ悪いことをしてしまったのか。そして私は決めた。もう2度とこんなことはしないと。

実はこの後にもう1度、私は鉛筆削りを壊すことになる。(しかも全く同じ方法で) その時に頭に浮かんだのはこの先生の言葉だ。自分の失敗を素直に打ち明けるのはこんなにささいな(はっきり言ってしようもない)ことでも恐かったし、勇気がいった。けれども、謝った後に見た先生の顔は怒るところかももう少しで吹き出しそうなくらい笑っていて、それが伝染するように私も尻込みしていた自分を笑ってしまった。

やはり今でも、失敗は恐いし、恥ずかしいし、かっこ悪いと思う。でもそれ以上にかっこ悪いのは、失敗を認めなかったり、失敗から逃げたりすることだとあの鉛筆削りは教えてくれた。それを実行していくことが私が壊してしまった鉛筆削りに対する、正しい「ごめんなさい」の表し方のような気がする。これからは私は色々な種類の「失敗」をしまくるだろう。でも私はその度にそれを認め、素直に謝ろうと思う。あの時小学6年生だった私も、今では中学3年生だ。体だけでなく、心も成長した人間に、私はなっていきたい。

——過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ——

これは孔子の遺した言葉であり、1台の鉛筆削りが私にくれた、「教訓」だ。